

ターニングポイントはポイントではなく プロセスである：

薬物依存からの回復における「労役経験」*

南 保 輔

1 人生の転機

「人生の転機」という表現がある。近年では、「ターニングポイント（転回点、岐路）」と言われることも多い。だが、ターニングポイントと言っても、それにはさまざまなタイプのものであるようだ¹⁾。そんなひとつに、「悪い生き方」を変えるというターニングポイントがある²⁾。本論は、そのような「人生のターニングポイント」が「ポイント（点）」ではなく、ある時間幅をもった「プロセス（過程）」であることを論じるものである。

取り上げるのは、薬物依存からの回復をめざす40歳代の男性Aさんの事例である。Aさんは、薬物依存がひどくなり40歳で薬物依存者のリハビリテーション施設であるダルクに入寮となった。ダルク入寮後も隠れて薬物を使っていたが、ある日万引きで捕まった。裁判で労役となり40日間を務めたのち、再びダルクに戻ってスタッフ見習いから常勤スタッフとなった。

Aさんにたいして、ダルク入寮後17回のインタビューを行った。そのうち4回は労役に行くまえ、13回は労役後に行われた。Aさんの薬物使用は、裁判の日を境にとまった。薬物使用がとまることは、依存者にとってはひとつの大きなターニングポイントである。薬物使用がとまったきっかけは労役だったという理解で、南は毎回のインタビューにおいてそのことについてたずねるようにした。インタビューは了解をえて録音し、文字起こししたものを基本データとしている。本論では、労

表1 労役についての語りの変遷

回	労役後 経過年月	語り	特記事項
01	0年01月	こんなもんかって感じでしたね。	労役直後
02	0年03月	あんまり。短い期間だったんで。	
03	0年07月	(《クリーンつくる》)きっかけのひとつになったんで： まああれはあれで：良かったなってゆうふうにも思います。	とまらなかつたとき苦しかった
04	0年09月	まああれは(あれで)いい経験なのかなあって、ゆうふうにも今でも、は思いかえます。	クリーン1年；やる気ない
05	0年10月	え：、まあ自分にとっては：そういう経験が自分のとまった、ことと関係しているのかなってゆうふうにも思ったりとか、してます。	施設満員
06	1年01月	たしかに労役は、自分の中でも、苦痛だったんですけど、自分がクスリ、ね、とめ、やめられたのは：その労役ってゆう部分じゃなくってもっとほかにもなんか、たくさんあったんで。	たまたまとまってる；仲間との関係性
07	1年02月	—	やっと回復
08	1年06月	その前の段階で：裁判所で：あの、牢屋にいか、罰金20万円払いますかって.hh言われたとき、が自分自分の中ではすごい大きかったんですよ、「ええ？」(という驚きだった)。	スタッフ研修 2か月；ターニングポイント
09	1年08月	やっぱり、自分の中の：負担あの(間隙)まだ、なんとかなるだろうと思ってた自分が、そうゆうふうにはバツって言われて、「うわ、どうしよう」って、「どうしようどうしよう」ってなった時に：クスリを使っちゃ(間隙)ったんですよ。	
10	1年11月	—	
11	2年01月	—	
12	2年06月	あとあと考えてみると、その、行かされたことに対してだったりあの、自分でやったことに対して責任を取るって、ことに対してはすごい大きかったなあっておも、おも、思います。	
13	2年11月	あの、だからクスリ止まったのか、じゃない、ですね自分はぜったいに。労役：だから止まったんじゃないって：もちろんその、お金の面ですてくれる誰かが出してくれなくて：自分で：やらなきゃいけないって、自分の責任を負ったって、いうのもあるんですけども：、も自分そっちよりも：どうしてかってつったら、やっぱりまわりのひととあの、当時、しん親身に接してくれたひと？	

* 《間隙》というのは、かなり長い沈黙を示す。そのほかの記号については、論文末の抜粋1の末尾を参照。

役後に行われた13回のインタビューを取り上げている。

まず、労役についての語りの変遷をたどる。労役の位置づけは、13回のインタビューにおいて変わっている。3節では、薬物使用がとまったことについてのストーリーを検討する。労役後13回目のインタビューにおいて、労役ととまったこととの関係が詳しく述べられた部分を取り上げる。

語りや意味づけは、話者が置かれている状況と深く結びついている (Briggs 1986; Gubrium & Holstein 2012; 桜井 2012)。4節では、薬物への欲求やダルクの状況など、Aさんの暮らしぶりを見ていく。仲間のサポートを中心とする毎日を送り見習いスタッフとなったことは、薬物使用をとめていくためのAさんの選択であった。

2 労役についての語りの変遷

労役後に行った13回のインタビューにおける労役関連の回答を表1にまとめた。インタビューが労役後何回目であるかと労役終了からの経過年月、そして当時の状況についての特記事項とを示している。13回のうち3回(07回目、10回目、11回目)では、労役を話題とすることをしていない。

本論では、Aさんの労役後の約3年間を表2のように4期に分けて検討する。

表2 労役についての語りの変遷：4期の鍵となる表現

期 (インタビュー回)	鍵となる表現
第1期 (01-02回目)	「こんなもんか」
第2期 (03-05回目)	「きっかけのひとつ」
第3期 (06-09回目)	「ほかにもたくさんあった」
第4期 (12-13回目)	「親身に接してくれたひと」

まず、それぞれの期の概要を述べる。

第1期 (01-02回目) 「こんなもんか」

労役後1か月と3か月のインタビューでは、労役体験については短いコメントしか聞かれなかった。「こんなもんかって感じでしたね」(01

回目)や「あんまり」思いださない(02回目)ということだった。

Aさんのこの3年間の大きな変化のひとつに、インタビューで話してくれる分量の飛躍的な増大がある。初期のAさんはほんとうに言葉数が少なく、インタビューでいろいろと聞きだそうとしてもすぐに終わってしまうことが多かった。たとえば、01回目のインタビューは22分で、02回目は27分だった。それが、12回目は1時間2分、13回目は1時間25分となっている³⁾。

第2期(03-05回目)「きっかけのひとつ」

第2期は、労役後7か月から10か月の時期である。Aさんは、ダルク入寮後も薬物使用をやめることができなかった。Aさんの依存薬物は市販薬であり、万引きし使用していた。薬物を使わないでいることを「クリーン」と言うが、労役がクリーンをつくる「きっかけのひとつになった」と03回目に述べている。04回目には「いい経験」と述べたあと、05回目は「自分のとまったことと関係している」と03回目とほぼ同じとらえ方となっている。

第3期(06-09回目)「ほかにもたくさんあった」

第3期は、労役後1年1か月から1年8か月の時期である。この時期のAさんは、「やめられたのは」「もっとほかにも」「たくさんあった」と言うようになった(06回目)。そして、労役体験よりも大きなのは、裁判で労役か罰金かと突き付けられたときだと言う(08回目)。そして、そのショックの大きさからこの日に、最後となる薬物使用をしてしまったと告白する(09回目)。

06回目のインタビューでは、労役体験そのものについては、「苦痛」だったと述べた。また、「たくさんあった」のはどんなことかとの問いかけに、「仲間との関係性だったり、まあ、いろいろ」と回答した。「仲間」は、3節で取り上げるストーリーにおいては、薬物使用をとめる決め手とされるものである。このことについての言及がこの時点で見られることは注目に値する。

第4期(12-13回目)「親身に接してくれたひと」

第4期は、労役後2年6か月から2年11か月の時期である。13回目

のインタビューでは、一連の流れが整理されて述べられている。薬物がとまったのは、「まわりのひと」のおかげだったと言うのである。12回目のインタビューでは、労役の重みが再び大きく語られている。第3期では労役そのものと労役につながる裁判の話が切り離されていたが、それがまとまったものとなっているのが第4期の特徴である。

以上、4期の変遷をおおまかに見てきた。3節ではより詳細な検討を行う。

3 労役ストーリーの詳細な分析

本節では、13回目インタビューでの語りを取り上げる。労役についてたずねた部分である。詳細なトランスクリプトを論文末に抜粋1として掲載した（「R」は調査者の南）。言いよどみがあったり早口の箇所があったりして、発話の特徴に着目するとさらに掘り下げることができるようなものであった。だが、ここでは表現されている命題内容に着目していく。

この部分を取り上げるのは、労役後の3年ほどについての総括となっているからである。やまだ（2000: 3）は、「物語」を「2つ以上の出来事をむすびつけて筋立てる行為」と定義する。本論では、「物語」ではなく「ストーリー」という言葉を使い、抜粋1を「労役ストーリー」と捉える。これは、本論の結論でもある、「ターニング」の「プロセス」をまとめているものだ。前節で紹介した4期にわたる発言が、ひとつのストーリーとして筋をもって配置されている。

抜粋1の部分では、以下の6つの命題が述べられている。なお、命題後の括弧内は抜粋1での行数を示している。

- 命題1 労役のことは思いださない（03-05行）
- 命題2 そうは言ったが実は振り返って、労役体験は自分にとって良かったと感じている（06-20行）
- 命題3 しかし、労役のおかげでクスリがとまったのではない（22-28行）
- 命題4 とまった要因として責任を直接に引き受けたことがあるが大きくはない（30-35行）

命題5 まわりの親身に接してくれたひとのおかげでとまった (37-41行)

命題6 以上のことに最近気づいた (43-48行)

こうまとめてみるとわかるのは、2節で分けた各期の発言が命題に対応しているということだ。

「労役のことは思いださない」という命題1は、第1期のインタビュー内容と対応している。「こんなもんか」という表現が第1期の特徴だった。「思いださない」というのは、「こんなもんか」という表現が示しているような、労役がそれほどたいせつとは思えないという位置づけを反映するものと理解できる。

命題2「労役体験は自分にとって良かった」は、労役を薬物使用がとまった「きっかけのひとつ」とする第2期と対応している。第2期では、薬物使用をしないクリーン期間が延びていくなかで、そのことと労役体験とをAさんは結びつけていた。

命題3「労役のおかげでクスリがとまったのではない」と「とまった要因として責任を直接に引き受けたことがある」という命題4の前半部は、第3期に述べられたことである。これは、第2期の見方がある意味否定している。だが、この否定の程度は命題3と第2期インタビューのものとはやや異なる。命題3ははっきりと否定しているのにたいして、第3期では労役も影響しているがほかの要因のほうが大きいという言い方になっている。

命題内容に照準するとしたが、この部分については発話の特徴にも言及しておきたい⁴⁾。「〔労役〕だからクスリとまったのか」(22行)と「じゃない」(24行)では、「だから」と「ない」が強く発話されている。「労役だからクスリとまったんじゃない」と聞くことができるようになってきている。この内容は「労役：(.) >だから<とまったんじゃないくて：」と繰り返されている(28行)。このときは、「だから」は早口で発話されている。これも強調と聞くことができる。そして、この2つの表現のあいだに「自分はぜったいに」(26行)という強調する表現までは含まれている。

命題5「まわりの親身に接してくれたひとのおかげでとまった」は、13回目インタビューのポイントである。このことは、実は06回目イン

インタビューでも語られていた。表1にある「もっとほかにもたくさんあった」ということばにたいして、それがどんなことかと南がたずねたのに、「仲間との関係性だったり」とAさんは回答していた。そのときは、「たくさん」のひとつとして提示されたのが、抜粋1においてはとまった要因のうちで「大きかった」(41行)とされているのが顕著な変化である。

抜粋1の労役ストーリーの特徴は、大きく2つある。第1に、ここまで見てきたように、それまでに労役に関連して語られた論点が網羅されていることである。そして第2に、これらの事項同士が比較考量されたうえで、流れをもったひとつのストーリーとして筋立てられているということだ。つまり、抜粋1の発言は以下のように要約できる。

労役のことは思いださない。いや、労役体験を振り返って良い経験だったと感じている。しかし、労役だから薬物使用がとまったというわけではない。法的な責任を直接引き受けたということもあるが、なによりもまわりの親身に接してくれたひとのおかげである。このように最近考えるようになった。

とくに、命題6にあたる「思いはじめ(て)」(抜粋1の48行)という部分が重要である。万引きでの逮捕から労役に行くまでの流れと、薬物使用をとめることができたということがひとつにまとめられたうえで、このことに最近気づいたと締めくくっているのである。

このような筋立てられたストーリーは、一朝一夕にできるようになるものではない。12回目のインタビューでも、先の6つの命題のうち、命題4と5は含まれないものの、労役の位置づけを整理するような語りが見られた。労役の位置づけが変化したとははっきりした言明が現れていたのである。具体的には、「一か月ちょっと行ったんだってぐらいにしか思ってなかった」のだが、実は「すごい大きかった」といまは思っている。労役直後は、「ぜんぜんわからなかった」と明言している。

12回目で重視されているのは、表1にあるように、「(労役に)行かされたこと」、「自分でやったことに対して責任を取る」ことだった。これらは、行為としては同じことである。Aさんには、「罰金20万円払いますか」、それとも労役に行くかという選択があった。生活保護で暮らしていたAさんに20万円は用意できない。ダルクという施設が出して、

後に返済していくということも考えられたが、そうはならなかった。「牢屋に行く」ことになった。これが、「行かされたこと」であり、「自分でやったことに対して責任を取る」ことだった⁵⁾。

12回目と13回目のインタビューでは、こういったことが「労役」の一部として捉えられている。初期には、「労役」といえば、40日間拘置所で作業した体験のみを指していた。それが、労役に行くことになった経緯も含めて考えるようになっていく。そのなかで、薬物使用がとまった要因として、労役体験そのものではなくて、労役に行くことを選ばせて支援してくれた、「まわりの、親身に接してくれたひと」を挙げるようになったのである。

以上、2節と3節とで見えてきたように、Aさんの薬物使用がとまったという「ターニング（転回）」は、万引きでの逮捕から裁判を経て40日の労役を務めるまでの数か月の期間にわたっていた。とても「ポイント」と呼べるようなものではない。

さらに指摘したいこととして、そのことがAさん自身のことばでまとまって語られるようになるまでには、労役後2年半以上の年月を要したということがある。このような考えに到達するまでの期間を「ターニングポイント」に含めるとするならば、「ポイント」はさらに長いものとなる。全体で3年以上にわたるということにもなるのである。

4 Aさんのダルク生活

ここまで、労役に関連するAさんの語りにも照準してきた。だが、薬物使用をやめるということは、NAで重視されている「新しい生き方」でもある（Narcotics Anonymous 2006; 南 2014）。これが具体的な生活のなかでどのように達成されたかを本節では示す。

Aさんは、ダルク入寮直後には、早く仕事を見つけて退寮したいと言っていた。インタビューの最後には、つぎに南が来たときにはいないかもしれないとあいさつ代わりに繰り返していた。そんなAさんだったが、労役後は一転、仕事探しに熱意を見せなくなった。ダルク入寮者の基本生活である1日3回のミーティングへの出席を励行しながら、新規入寮者のサポートをしていた。「なにかもやる気がなくて困ってます」と04回目インタビューではっきりと述べた。この直前には、最後

に薬物を使ってから1年という「クリーン1年のバースデイ」も迎えていたが、「油断とかすると、危ないのかな」と薬物使用への不安も表明していた。

「早く出たい」と言っていたのとは対照的に、このころのAさんにとっては、ダルクが「居場所」となっていた。仲間にもまれてダルクで生活しているかぎり薬物使用はしないでいられるという感触をAさんは持っていた。そのために、仕事を見つけて自立することにたいして熱が入らなかったようだ。この当時、ダルクの利用者が多くて施設のミーティングでは全員が着席するのに苦勞するというような状況だった。Aさんは、まだ自分がいてもいいのかという懸念も抱えていた。

07回目インタビューでは、興味深い話があった。Aさんは、主治医の精神科医から「やっと回復してきたね」と言われたと教えてくれた。それは、診察時に仕事をしたくないという思いをもらしたときのことである。これはどういうことだろうか。

依存者の習性として、自身の本当の気持ちを隠すということがある。正直になって本音を語るのは、回復の兆候とされている。「仕事をしたくない」と言うことはふつうはわがままと見なされるため、なかなか口にできない。だからこそ、これが言えるようになることは依存からの回復を反映するものとされるのである。

ちょうどこのころ、Aさんのいたダルクでスタッフの移動があり、人手不足となっていた。それまでもAさんは手伝いとして事務所の電話番号をしたりしていたが、正式に「スタッフ研修」を始めることになった。労役後1年4か月ごろの第3期のことである。その後、非常勤スタッフから常勤スタッフとなっていくのだが、ダルクスタッフとなったことが、Aさんの回復にとって大きな選択となっている。

ダルク入寮者としてAさんは、生活保護で暮らしてきた。スタッフ研修中は無給であり、非常勤、あるいは常勤となっても、それほど多額の給料となるわけではない。生活保護受給中は収入に応じて保護費は減額される。社会でふつうに働けば、楽に一人暮らしをしていくぐらいの収入は得られる。

Aさんには、できれば多くの収入を得たいという事情があった。それにも関わらず、ダルクに「住み込んで」スタッフをしている。ダルクスタッフは、利用者に「背中を見せる」ことが求められている（南 2015）。

薬物への欲求を抑えるのに苦しむ利用者に、かつての自身の姿を重ねる。ダルクを出てひとり暮らしをすれば、またクスリを使ってしまうという思いから、消極的な動機でAさんはダルクスタッフとなった。だが、そのおかげでAさんは確実にクスリから「守られた」暮らしを送っているのである。

表3 薬物使用の欲求の変遷

期（インタビュー回）	薬物使用の欲求についての発言
第1期（01-02回目）	「(『使いたい気持ちが』)なくなってきた」
第2期（03-05回目）	「欲求もなく、落ち着いてきた」
第3期（06-09回目）	「表だって欲求はない」、「すごい薬」、「面白いぐら いない」
第4期（12-13回目）	「たぶんあると思います」

最後に、Aさんの状況を薬物への欲求という観点からまとめておこう。表3に各期の代表的回答をまとめた。薬物依存からの離脱においては、最後の使用から1年がひとつの区切りとなる。Aさんは、第2期の途中に薬物を使わない期間である「クリーン」1年を迎えている。「なくなってきた」（第1期）から、「欲求もなく、落ち着いてきた」（第2期）、「表だって欲求はない」（第3期）と、表現としてはそれほど大きな変化には見えないかもしれない。だが、その語り方や前後の話題などから、その変化は大きいと感じられるものだった。第1期はまだまだ欲求と日々闘っている様子が感じられた。使ってしまうことを避けるために単独行動は避けていた。第2期はそれがまだ残っているようだった。第3期になると、そういった懸念や対策もなくなっていた。スタッフという利用者を支援する立場にいる者としての責任や自信も感じられた。第4期のように、「たぶんあると思います」と欲求の存在を正面から認めるころには、それをコントロールできる、また、しているという自信を感じとることができる。

2節と3節で見たような語りの変遷とまとめのストーリーとは、このように薬物使用の欲求が弱くなっていく変化とも関係している。欲求の減衰が労役の位置づけの組み替えを促進し、またこの組み替えが薬物使用欲求をさらに沈静化させるといったサイクルを形成していたとすることができるのかもしれない。

5 Aさんの「ターニングプロセス」

2節と3節では語りの変遷を論じ、4節では具体的な生活状況について紹介した。Aさんの薬物使用がとまるという「ターニング」は、裁判でのショック後に立てた、クリーン3か月をつくって労役に行くという決意と、それを支えてくれたまわりの人間のサポート、そして、とまったことの意味づけをなんども反芻して話すという営みからなっていた。

ダルクの入寮者は、1日3回ミーティングに出席している。ミーティングでは、薬物に関係することも直接関係しないことも含めて、自分の経験や考えを正直に話すことが求められる。これこそが「新しい生き方」を作っていくと考えられている。Aさんの語りの変遷は、まさにこのような毎日の実践の産物である。南という調査者とのやりとりが、まったく無関係であるとは言えないかもしれないが、労役について振り返ることは回復をめざす薬物依存の当事者にとって生活に根ざした課題なのである⁶⁾。

本論で「労役経験」としたのは、逮捕の日から数えると労役が終わるまで半年近くにわたる日々のことである。また、3節で見たとおり、流れをもった語りとなるまでと考えると3年以上のことである。とても、「ポイント（点）」と呼べるようなものではない。

ある出来事や体験の「意味」は固定したものではない。本論が示したように、振り返るごとにその意味づけは変化していく。この時間というものにはほかの特徴も指摘できる。それは、振り返る期間が長くなればなるほど、元の「ターニングプロセス」が相対的に短くなっていくということだ。Aさんの場合、逮捕から労役終了まで半年あった。労役直後には、この半年は長い時間と感じられる。しかし、労役後2年半ほどが経過した時点で振り返ると、「半年」という時間も、「逮捕されて労役から帰るまで」というまとまった期間となる。労役後の2年半という時間にたいして、半年という期間は5分の1ほどとなるのだ。「ポイント（点）」と言うにはまだ無理があるかもしれないが、労役後1か月の時点で、その「6倍」の時間を考えるのとでは、相対的に「かなり」短くなっているということがあるだろう。

本論では、「ターニングポイント」が、振り返って再解釈を繰り返す

なかで作られるものであり、また「ポイント」ではなく時間幅のある「プロセス」であるということをおある薬物依存者の回復事例を元に示した。

注

* 本論文は、科学研究費補助金基盤研究（C）25380698「薬物依存者の『社会復帰』に関する社会学的研究」（代表：南 保輔）の研究成果である。調査に協力していただいたダルクのみなさんに大いなる感謝を表したい。なお、個人名は匿名化している。

- 1) 宗教上の「回心」もそのような変化のひとつだろう。これについては、たとえば、芳賀と菊池の労作（2006）がある。
- 2) 犯罪からの離脱（desistance）については、近年急速に研究が蓄積されてきている。イギリスのリバプール離脱研究についての Shadd Maruna の報告はなかでも大きなインパクトがあった（Maruna 2001=2013）。
- 3) 本論原稿を A さんに確認してもらったときにこのことが話題となった。自己省察が深まり多く話せるようになった変化に資するものとして、南たちによるインタビュー調査の貢献があったと感謝された。
- 4) 下線は強調、(.) は 0.2 秒以下の短い沈黙、: は音の引き延ばし、> < は早く発話されていることを示す。抜粋 1 の凡例は抜粋 1 の下に示している。
- 5) 罰金も労役も刑罰であり、当初南には、法的な責任を引き受けるという点で違いはないように思われた。だが、本論原稿確認のインタビューでこの点を A さんに確認したところ、両者に大きな違いがあることがわかった。これ以前にも、A さんは施設に借金をしてそれを生活保護費から少しずつ返済していくことをしていた。罰金刑となった場合、その借金額は 20 万円と大きいものの、A さんにとってはそれまでとたいして変わらない。対照的に、労役に行くことは、まさに「自分でやったことに対して責任を取る」ことであったのだ。
- 6) 本論の分析などが調査者のみの関心ではなくて、当事者 A さんにとっての関心であるということを示すほかの証拠もある。A さん自身が、「ターニングポイント」ということばを使っていることだ。08 回目インタビューにおいて、罰金か労役かと裁判で言われたときに、「それがなんかけっこう自分の中でターニングポイントになったような気がします」と A さんは述べている。

参考文献

- Briggs, C. L. 1986. *Learning how to ask: A sociolinguistic appraisal of the role of the interview in social science research*. Cambridge University Press.
- Gubrium, Jaber F. & Holstein, James A. 2012. Narrative practice and the transformation of interview subjectivity. In Gubrium et al. eds. *The Sage handbook of interview research: The complexity of the craft*. Sage. 27-43.
- 芳賀 学；菊池裕生. 2006. 『仏のまなざし、読みかえられる自己：回心のミクロ社会学』ハーベスト社.
- Jefferson, G. 2004. Glossary of transcript symbols with an introduction. In Lerner, G. H. ed. *Conversation analysis: Studies from the first generation*. John Benjamins. 13-23.
- Maruna, Shadd M. 2001. *Making good: How ex-convicts reform and rebuild their lives*. American Psychological Association. (= 2013. 津富 宏；河野莊子訳 『犯罪からの離脱と「人生のやり直し」：元犯罪者のナラティブから学ぶ』明石書店.)
- 南 保輔. 2014. 断薬とスピリチュアルな成長：薬物依存からの「回復」調査における日記法の可能性. 『成城文藝』227: 62-42.
- 南 保輔. 2015. ダルクスタッフとしての回復：薬物依存者の「社会復帰」のひとつのかたち. 『成城文藝』232: 74-47.
- Narcotics Anonymous. 2006. 『ナルコティクスアノニマス』第5版日本語翻訳版. Narcotics Anonymous World Services.
- 西阪 仰. 2008. トランスクリプト（転写）の記号一覧. 西阪；高木智世；川島理恵 『女性医療の会話分析』文化書房博文社. 9-13.
- 桜井 厚. 2012. 『ライフストーリー論』弘文堂.
- やまだようこ. 2000. 人生を物語ることの意味：ライフストーリーの心理学. やまだようこ編 『人生を物語る：生成のライフストーリー』ミネルヴァ書房. 1-38.

抜粋1 労役だからとまったんじゃなくて

- 01 R: じゃあまた労役のことを。最近労役についてなにか考え
02 たり思い出したり
03 A: (4.6) はない: : :
04 R: ないですか。
05 A: ないです。
06 あの (0.4) >もちろんふりかえるんすよねあの< (1.3)
07 とう当時のじぶんというか
08 R: はいはい
09 A: その捕まったとき: ええ (1.0) むかえに来てもらった
10 ときとか、え: (1.7) 労役いったこと、思いかえすけど:
11 (1.0) ん: (5.5) やっぱり-やっぱり>ど (んなに) かん
12 がえても<: (1.3) >労役の体験<はよかったんですよ
13 自分にとって=
14 R: =ん:
15 A: (1.3) いままでそ: ゆ:(.) 留置所はあ-あったあったん
16 ですけど:
17 R: はい
18 A: >拘置所とか刑務所とかかって [(はい)
19 R: [ん: :
20 A: >たしかにその経験はよかったんですけど: <
21 R: ん:
22 A: (0.6) あの: (0.7) だからクスリとまったのか=
23 R: =ん[:
24 A: [じゃない
25 R: (0.3) ん:
26 A: ですね: 自分はぜったいに。
27 R: ん: : =
28 A: =労役:(.) >だから<とまったんじゃなくて:
29 R: ん:
30 A: .hむしろその、お金の面で: 出してくれ-だれかが出して
31 くれなくて: [自分で: .h
32 R: [ん:
33 A: (0.5) やらなきゃいけないって。自分の責任を負ったって、
34 R: あ:
35 A: ゆうのものあるんすけども:
36 R: ん:
37 A: も: 自分そっちよりも: どうしてかってつったら: (0.5)
38 やっぱりまわりのひとと: あの (0.3) 当時 (0.5) しん
39 親身に接してくれたひと? =
40 R: =はい。はい。
41 A: の力ってやっぱ大きかったなって。
42 R: ふ: ん。
43 A: そっちたぶんおれ (.) そっちだな。ん、労役だから: と
44 まったんだとか

- 45 R: んんん
 46 A: てゆう (.) のも強かったんですけど：＝
 47 R: ＝はい。
 48 A: いや：ちがうなっておも-思いはじめ (て)
 49 R: ふ：ん。

* 抜粋1の凡例は以下である (Jefferson 2004 ; 西阪 2008 : 9-13) :

- [複数の参加者の発する音声が重なり始めている時点は、角括弧
 [によって示される。
 = 2つの発話が途切れなく密着していることは、等号(=)で示
 される。
 () 聞き取りが確定できないときは、当該文字列が()で括られ
 る。
 (m.n) 音声途絶えている状態があるときは、その秒数がほぼ0.2秒
 ごとに()内に示される。
 (.) 0.2秒以下の短い沈黙は、()内にピリオドを打った記号、つ
 まり(.)という記号によって示される。
 言葉：： 直前の音が延ばされていることは、コロンの数で示される。コロ
 ンの数は引き延ばしの相対的な長さに対応している。
 言- 言葉が不完全なまま途切れていることは、ハイフンで示される。
 .h 吸気音は.hで示される。hの数はそれぞれの音の相対的な長さ
 に対応している。
言葉 音の強さは下線によって示される。
 > < 発話のスピードが目立って速くなる部分は、左開きの不等号と
 右開きの不等号で囲まれる。

“Turning Points” Are Not Points but Processes:

A Study of a Recovering Addict, with a Focus on His “Rendering a Service” in Jail

Yasusuke MINAMI (Seijo University)

yminami@seijo.ac.jp

ABSTRACT

People often say, “such and such was a turning point in my life.” Mr. A had a serious drug addiction problem and had a hard time quitting his habit. After he was arrested for shoplifting, he was sentenced to “rendering a service” in a jail for 40 days. He stopped using drugs after the court’s ruling. Mr. A was interviewed 13 times after his service in jail. The sentence itself appeared to be a “turning point” for him. However, in his accounts, his causal attribution of his quitting drugs changed, from being the result of his experience in jail, to his acceptance of his own responsibility, then finally to the efforts of the others who supported Mr. A while he went through the process from his arrest to the completion of his sentence. His “turning point” lasted as long as six months, and the content of his accounts changed over the three-year period of the interview research. It can thus be argued that the “turning point” of Mr. A’s recovery was not a single “point” in time, but a “process” over a span of time.

KEY WORDS : turning point, drug addicts, recovery, life story